

目取真俊『虹の鳥』考

フランツ・ファノンの暴力論を越えて

尾崎文太

はじめに

目取真俊の二〇〇四年の小説『虹の鳥』の単行本には、鮮やかなオレンジ色の帯が付けられており、そこにはこう書かれている。「基地の島に連なる憎しみと暴力。それはいつか奴らに向かうだろう。」ここには、この小説の読み解き方についての、明確な指示がある。ここで言及される「奴ら」とは、「基地」の存在を通じて彼の地で「暴力」を吐き出し続ける主体としての在沖繩米軍を指す。沖繩における「あめりかー」の存在こそが、沖繩に暴力をもたらす主体であり、また同時に沖繩におけ

る暴力を発生させる媒体でもある。「奴ら」によって生み出され島に蔓延していった暴力は正しく「奴ら」に向かって投げ返されなければならない。表紙に付せられた帯は、端的かつ明快にこの小説をそのような趣旨の下に読解することを要求している。

ところで、暴力の発生源に対して暴力を投げ返すという構図は、私の意識を、『地に呪われた者』においてフランツ・ファノンが分析した暴力の概念へと結び付ける。『地に呪われた者』では、アルジェリアにおける脱植民地化の運動の中で暴力がいかなる役割を果たしたかについての詳細な分析がなされ

るが、そこで暴力は「ブーメラン」的現象として理解される。すなわち、植民者が作り出し植民地社会に課した暴力は、最終的には、「対抗暴力 contre violence」として正確に植民者自身に向かって投げ返される。私は本論考において、このフランツ・ファノンの暴力論を参照軸の一つとしながら、目取真の小説『虹の鳥』における暴力の意味を、ここ数十年の間に沖繩の地に起きた事態と関連づけながら、考察してゆきたい。

一 アメリカという暴力、沖繩という犠牲

先に述べたように、『虹の鳥』における暴力は、在沖繩米軍の存在に結び付けて理解されることになるのだが、小説の大半の部分において、この暴力とアメリカの連結は、物語の背後のメタレベルに留まっている。物語の前景において具体的に展開される暴力は、少女買春をネタにした恐喝によって収入を得ている若いギャング団の発動する暴力である。特に売春を強要され、「金を生む道具（目取真2006：74）」として扱われる少女マユへの暴力は、彼女の人間としての尊厳そのものをも失効させる仮借なきものとして描かれ、読者に徹底した嫌悪感を与える。この小説は、度重なる性暴力と売春の強要によって「体と心を深い奥からゆっくりと壊している（同書：66）」少女マユと、

ギャング団のリーダー比嘉の指示によりマユの管理をする少年カツヤを中心に展開する。カツヤは、自分の現状を嘲りながら「この現実がすべて消えてなくなり（略）」一からやり直せれば（同書：66）」と夢想する。そして彼は、周囲の者達は全滅するがそれを見た者だけは生き残ることができるといふ伝説の「虹の鳥」を追い求める。しかしながら現実のカツヤは、比嘉の絶対的な暴力によって、身体と精神の双方から完全に彼に従属させられている。一方マユに関しては、彼女に与えられた暴力が、既に彼女を「人間」存在の範疇から逸脱する位置まで貶めているが、同時に彼女に振るわれた暴力それ自体が、彼女の内部で反射としての、あるいは反作用としての対抗暴力の胎動をもたらしてもいた。暴力を究極まで吸収したマユの身体は、ある日新たな別の暴力となり、爆発する。

マユの身体に胎動する新たな対抗暴力は、四つの展開をみせる。最初の二つの暴力は売春相手の男に向けられるが、三つ目はそれまでマユに対して振るわれてきた暴力の現実的主体である比嘉に向けられる。マユは比嘉にシンナーをかけて焼き殺す。そして四つ目の暴力は、一見彼女とは無関係の米兵の子供に向けられる。小説のラストで、マユは、アーミーナイフでアメリカ人少女の首をかき切る。そしてマユとカツヤは、幻の虹の鳥を求めて、ヤンバルの森奥深くへと消えてゆく。

マユの身体を介して実現したこの四つ目の暴力において、小説の具体的前景は、象徴的に小説空間を支配していた後景へと結びつく。ギャング団による少女売春の強制という具体的な暴力の位相が、沖繩の空間に遍在する米軍の暴力の位相へと接ぎ木される。この接合は一見すると、あまりに突飛である。しかしながら注意深く読めば、作品の至るところで米軍の描写が具体的暴力へと結びつく射程を備えながら綿密に織り込まれていることが分かる。例えば小説の冒頭近くには売春相手にマユが暴力を振るうシーンがあるが、その直前に次のような一節が挿入されている。

対向車線を迷彩色をほどこした米軍の大型トレーラーが二台通り過ぎた。下腹に響くタイヤの音と同時に、吹き付けられた排気ガスがエアコンの通風口を通して車内に入り込む。車内循環にしているのにボロ車が、と舌打ちし、カツヤは右手にある那覇軍港を見た。(略)ふと、これだけの敷地ならどれくらいの軍用地料が落ちるんだらうか、と思った(同書…)。

ここでカツヤは、無意識のうちに、売春を強要されるマユが想定外の行動をとったことへの苛立ちと沖繩の日常空間内の米軍存在への嫌悪感を共鳴させている。このように、一見すれば

物語の表層的な展開から無関係に見える米軍存在の描写こそが、この小説における諸々の具体的暴力を背後から支える象徴的な基底通音として機能している。

ところで本作品では、米軍による暴力の具体的例示として、一九九五年に起きた三人の米兵による沖繩人少女の拉致レイプ事件が取り上げられている。ただしこの暴力事件に関しては、実際の暴力の場面は描かれることなく、その抗議集会の様子が描かれる。しかしながら佐藤泉による本作品の分析によれば、一九九五年十月二日に行われた米兵レイプ事件への大規模な抗議集会という歴史的出来事が二〇〇四年に発表された小説作品の空間内に組み込まれていることが、本作品の問題意識の位相を示す決定的な要素であるという(佐藤：164-165)。一九九五年は米兵による性暴力とそれに対する全県的な抗議が起きた重要な年であるが、一方の二〇〇四年も、沖繩国際大学に米軍のヘリコプターが墜落し、大学が米軍によって封鎖され、「占領」される事態が起きた象徴的な年である。そして二〇〇四年から一九九五年を眼差す本作品は沖繩における米軍の暴力の歴史にある種の立体的視点を導入する。

佐藤は、作品の舞台である一九九五年の米軍の暴力と、物語が書かれた時点である二〇〇四年の米軍の暴力に異質なものを見とり、それがこの作品の性格に根本的な影響を与えている

と指摘する。すなわち一九九五年の事件では、暴行を受けた少女の存在が、「犠牲」として「政治のメカニズム」における「意味」を持ち得た(同書:186-185)。ここで米兵によって発動された暴力の悲劇は、その中にひとつの政治的意味を見いだし、それを社会変革への契機に昇華させる可能性を備えていた。

しかしながら一方で、二〇〇四年の時点では、米軍の暴力による沖繩の犠牲の中になんらかの政治的意味を見いだすことが不可能であるという事態が出現する。二〇〇四年は「沖繩そのものが『犠牲化不可能』なものとして新たに作り出され(同書:189)」。た時期であり、そのような文脈で米軍による沖繩国際大虐学占拠の暴力性すらも、「犠牲」としての政治的意味付けをもたらしつつはない。例えば新城郁夫が、この二〇〇四年の事件とそれに対する反応に関して「(沖繩の)声は政府と国民いづれからも黙殺されている。しかも、この黙殺は、ただの政治的無関心ではない。無関心を装うこの黙殺の中に、それこそ人種主義あるいは植民地主義としか言いようのない政治的暴力が発動されている(新城2005:48)」と表現する時、それは以下の事態に呼応している。すなわち一九九五年の時点では、アメリカの暴力による沖繩の「犠牲」が、その悲劇を乗り越えて政治化される過程において可視化されていたのに対して、二〇〇五年の時点では、同様の「犠牲」が、政治化の不可能性あるいは

政治的無関心によって不可視化されているのだ。そしてこの暴力とその犠牲から政治的意味が奪われ不可視化される過程こそが、まさしく沖繩において「植民地主義としか言いようのない政治的暴力」への逆行が現実化していることの証左となる。

以上のことを考慮した上で、再度佐藤の分析を見てみよう。作品の後半で、米兵レイプ事件への抗議集会が行われているのと同じ時に、あるホテルの一室で、マユは比嘉たちによって凄惨な性的リンチを受けている。しかしながら「米兵に暴行された少女のために数万人が集まって、ベッドでうつぶせになっているマユのことを気にする者はいなかった(目取真2006:192)」。このような状況に関して、佐藤は「〇四年のフィクションは『犠牲』化する政治からはるかに退行した地点で、無意味なままに打ち捨てられた存在が登場したことを告げている(佐藤:188)」と分析する。すなわち、一九九五年という時代設定内で非政治的で不可視的な犠牲として想定されたマユの身体は、二〇〇四年の沖繩の現実の隠喩として機能している。

しかしながら「犠牲化不可能な生」として究極的な暴力を受けたマユは、次の瞬間、その人間性をほぼ失効したかに見えた身体の中に、突如として新たな暴力を発動させる。そしてこの暴力は、対抗暴力として、正確に暴力を振るった主体に向かって投げ返される。その時、この政治化不可能な対抗暴力の、「不

「メラン」現象を、どのように解釈すればよいのだろうか。

二 ファノンの暴力論とその幻想的次元

ここで、『虹の鳥』における暴力分析の材料とするために、『地に呪われた者』におけるフランツ・ファノンの暴力論について詳しく確認したい。ファノンは、植民地状況の中で被植民者に宿る暴力について、次のように書いている。

被植民者の内に生じる暴力の発展は、彼らが抗議する植民地体制によって行使された暴力の大きさに対応したものとなるだろう。〔略〕テロが対抗テロを生み、暴力が対抗暴力を生む (Fanon : 85-86)。

被植民者に対して振るわれた暴力の大きさが、そのままそれに比例して、植民者に対して投げ返される対抗暴力の養分となる。なぜならば、植民地社会とは、良心の呵責もなく覆い隠されもしない「純粹暴力の言語」の上に打ち建てられた体制だからである (同書 : 85)。

しかしながらファノンは、脱植民地化の初期の段階において「被植民者の対抗暴力は」同胞殺しの闘争に消費される

(同書 : 56)と指摘する。すなわち当初の段階で彼らの怒りは、内部の部族抗争という誤った方向に向けられる。そこで重要になるのが、彼らの暴力を正しい対象に向けて「再方向付けする」ことである。

以上のことは、マヌの身体に加えられてきた暴力が彼女の内で対抗暴力となって発現したこと、そして当初はそれが誤った対象(完春相手)に向けられていたが、最終的には正しい相手に(まず直接的な抑圧者である比嘉に、そして最終的には象徴的な抑圧者である米兵に)正しく投げ返されるに至ったことと表層的には符合しているように思われる。

しかしながらここで問題となるのが、先に述べたマヌの暴力の非政治性がファノンの暴力論とどのように関係するかという点である。ファノンは、脱植民地化の闘争における暴力の政治化の重要性を再三強調している。彼が「被植民者〔略〕は今日、言葉の最も世界的な意味において政治的動物なのだ (Fanon : 82)。(傍点引用者)」と言う時、彼の主張は、脱植民地化の運動の過程で抑圧者に投げ返されるべき対抗暴力が発動されるのは、その運動が政治化される限りにおいてであるということを意味している。しかしながら、マヌの対抗暴力において確認できるのは、むしろその政治性の真空である。

マヌの暴力における非政治性は、『虹の鳥』とらんで目取

真の暴力への志向が強く反映された掌編小説『希望』との比較において、より明らかになるであろう。この短編においても、『虹の鳥』と同様に、主人公によって米兵の子供殺しが実行される。しかしながら、それがマユの殺人と決定的に違うのは、『希望』の主人公の青年は、その殺人の際「今オキナワに必要なのは、数千人のデモでもなければ、数万人の集会でもなく、一人のアメリカ人の幼児の死なのだ」という声明文を公に新聞社に送りつけていたという点である(目取真2002:288)。

ところでファノン¹⁾は、脱植民地化の過程における「政治化」について、それは「精神を開かせること」であり、「精神を呼び起こすこと」であると説明している(Fanon:187)。それならばこの「政治化」としての精神を「開かせ」「呼び起こす」試みは、開かれた対話を想定した呼びかけの行為から始めなければならぬであろう。政治がポリスが制御し導くための技術であるならば、その本質は、共同体の構成員に呼びかける試みの中にあるはずである。そのような意味で、『希望』の主人公の声明文を送りつけるという行為は、その中に呼びかけの契機を含んでいるために、十全な対話には至らずとも、彼の行為の政治性を保証する担保とはなる。彼は、その暴力において政治的手続きを踏んでいるからこそ、自らの行為を「この島にとって自然であり、必然なのだ(目取真2002:290)」と合理的に

理解することができた。

一方マユの暴力においては、そこにいかなる政治性も確認できない。マユの暴力に、社会との開かれた対話の意図はない。それどころか、マユの表象において、そこに一切の人間性が拒絶されていることに、読者は驚きとまどろ。彼女は「人間」ではなく「金を生む生き物」であり、しかしながらその有用性故に完全に殺されることなく、非人間的生を生かされている。このことは、『地に呪われたる者』において、植民地社会では「半分人間で半分動物である原住民」という存在が作り出されるが、その生産性への打算から原住民が「殴られ、栄養失調に追いやられ、病気になる、怯えるのは、ある限度まで(Satre:24)」であると説明されていることと、見事に一致する。マユは、殴られ、栄養失調に陥り、病気に罹り、それでも売春を強要されるが、その経済的生産性故に、完全にその身体を破壊されることはない。ファノンは、そのような劣悪な状況下にある被植民者が正しい対抗暴力を発動すること、彼ら／彼女らが政治化すること、そして彼ら／彼女らが「人間」になることを、同一の行程として捉えなければならぬと考える。対抗暴力は、非政治化され動物化、物化されていた被植民者が、政治化し「人間」になる過程を通じて正しく発動される。ファノンにとって暴力を媒介とした脱植民地化の試みは、新たな政治

空間を現出させる試みであると同時に、「新たな人間 *homme neutre*」を立ち上げられる試み (Fanon: 305) でもあった。しかしながらマヌの対抗暴力においては、この二つの契機、すなわち政治化の契機と人間化の契機が、決定的に抜け落ちている。それならば、彼女の対抗暴力はいかにして発動し得たのであろうか。マヌの比嘉に対して向けられた暴力の場面において、彼女の暴力を発動させた直接的契機は、それまで以上に凄惨な性的暴行であった。しかしながらそこでの彼女の覚醒は、彼女の主体的意識によってもたらされたものでは決してなく、それはあたかも超越的な外部の審級が彼女の身体を媒介として実現した変態であるかのような、超自然的な覚醒であった。このことは、比嘉を焼き殺して、「焦点の定まらない目」をしたマヌの「浮き上がった背骨を境に背中が割れて異様な生き物が姿を現 (目取真 2006: 201)」したという描写が、象徴的に表している。同様に、米兵の子供殺しの場面でも、そこでカツヤが聞いた「マヌの本当の声」は、彼女の「瞳の奥で動いた何か」の声であった。そしてカツヤは、殺されたアメリカ人の少女の血の香りに「濃い塩分と海藻の匂いが混じった潮の匂い」を感じる (同書: 219)。この最後の殺人の段階において、マヌの暴力は、「潮の匂い」によって表される象徴的な沖繩の自然へと結びつく。そしてふたりは、政治的公共圏の外部に設定された幻

想的場所としてのヤンバルの森の奥深くを目指し、物語は終結する。

再度確認すれば、ファノンの暴力論において、被植民者の暴力は、政治化と人間化を経て、正しい対抗暴力として成就する。一方、圧倒的な抑圧下にあったマヌが対抗暴力の主体として覚醒したのは、彼女の身体の超越的な審級との一体化を通じてであり、彼女の身体の象徴的次元への昇華を経てであり、畢竟それは「幻想」との同化を意味するものであった。彼女の対抗暴力は、現実的政治性のレベルや具体的人間性のレベルを捨象することによって幻想的な飛翔を可能にした。

ところでジュディス・バトラは、『地に呪われた者』におけるファノンの暴力論自体にも幻想的側面が認められることを指摘している。彼女は「暴力、非暴力」と題された論文の中で、「ファノンはこの〔略〕超人間的能力を、補償をもたらすもの *compensatory* であり不可能であり幻想的 *fantasmatic* であるが、〔植民地社会の〕条件下では十分に理解可能なものとしてみなしていた (Butler: 225)」と指摘する。すなわち、植民地社会という特殊な状況にあっては、「超人間」という具体的人間の身体性を超越した「幻想」が、現実レベルで被植民者に課せられている種存在論的な欠落と劣等性を「補償」する機能を果たしてくれるというのだ。

ところでアドラーの心理学を繙くまでもなく、ある身体的精神的欠陥の「補償」は、その主体にとってひとつの「癒し」として機能する。そして、ここまで議論を進めてくると、あるひとつの仮説が浮かび上がってくる。それは、この小説において重要なことは、マユの身体を媒介として発動される対抗暴力が正しい相手（「奴ら」）に向かって投げ返されることよりも、マユの対抗暴力が幻想的次元において成就することによって沖繩人男性としての「私」（カツヤ）の「癒し」が実現することにあったのではないか、という仮説である。ここにきて私は、この物語を、植民地的暴力によってある種の劣等性を強制され続けてきた沖繩人男性カツヤの癒しの物語として読解する可能性にたどりつく。

三 ふたつの非政治的暴力

ここで再度、作品内で描かれる暴力の諸相が持つ意味と、それらの暴力がカツヤにどのように関わっているかについて確認したい。作品内で主要な役割を果たす暴力は、大きく分けて二つあり、一つはギャング団のリーダー比嘉の暴力、そしてもう一つは、その比嘉の暴力の対象となりながらも自らも衝動的に暴力の主体となるマユの暴力である。これら二つの暴力は、ファ

ノンの暴力論に照らして、比嘉の暴力を植民地状況下における抑圧者の暴力、マユの暴力を被抑圧者の対抗暴力の比喩と捉えることは、先に論じた政治性の問題を留保すれば、可能であろう。

しかしながらここで私は、ファノンの暴力論とは別の視点を導入することによって、これら二つの暴力の更なる分析を進めてゆきたい。ここで参照したいのが、フランスの社会学者ミシェル・ヴィヴィオルカが提唱した、超政治的暴力 *Metapolitical violence* と政治下位的暴力 *intrapolitical violence* という概念である。ヴィヴィオルカは二〇〇三年の「暴力の新しいパラダイム」と題された論文の中で、現代社会に現れた新たなタイプの非政治的暴力を表すのに、この二つの概念を用いる。ヴィヴィオルカによれば、今日のグローバル化された社会では、「政治的暴力を」上方と下方から包囲する新しい形態（Wieworka: 126）の暴力が出現していて、彼はそれらをそれぞれ超政治的暴力と政治下位的暴力と名付ける。これら二つの暴力は、一九六〇年代の世界、すなわち『地に呪われた者』の舞台となった世界で有効であった政治的暴力が失効した後には現れる非政治的暴力である。

ヴィヴィオルカによれば、政治下位的暴力は、政治的目的性を欠くところで「厳密な経済的企図」に基づいて展開する暴力

であり、そこには組織的強盗や身代金目当ての誘拐などが含まれる。そしてそのような政治下位の暴力の特徴は、法や警察組織に象徴される国家機能の衰退に結び付けて分析される。政治下位の暴力は、政治権力に対抗するのではなく、弱体化した政治権力を可能な限り遠ざけながら、非合法的領域に留まりその経済活動に専念する（同書：127-129）。そして私は、この政治下位の暴力が比嘉の暴力に符合することを確認したい。本作品において比嘉の暴力は、売春と麻薬の密売を目的とした徹底した経済的合理主義に則って展開され、またその効果は、公的な政治の無力さと相まって、より確実なものとなる。例えば比嘉が中学の不良グループを支配していた時期、カツヤが「教師たちがまったくあてにならないのは分かりきっていた」と諦観するのは、まさに公的な政治の無力さが政治下位の暴力の絶対性を決定づけている事態として描かれている。そしてその絶対性ゆえに、カツヤは物理的にだけでなく精神的にも比嘉に従属することになる。比嘉の政治下位の暴力のみが、唯一彼に「救われたような気持ち」を与える力を持っており、だからこそ「比嘉から見放され、置き去りにされること」が、何よりの「救い」と不安」を彼に与えた（目取真 2006：60）。

一方超政治的暴力は、「交渉の余地のないもの」「絶対的なもの」として発現し、その価値の絶対性は政治の上位におかれる。

超政治的暴力はしばしば宗教的価値として表され、そこでは「政治が〈神〉の要求に従属する（Wiewiorka：130）」ところで、マユの暴力を、比嘉の政治下位の暴力に対応するもう一つの非政治的暴力として、超政治的暴力と捉えることは可能であろうか。ヴィヴィオルカによれば、超政治的暴力は「政治的関係性への参与とは全面的に分離したアイデンティティ（同書：130）」に立脚した暴力であり、多くの場合それは、宗教的あるいは民族的アイデンティティとして現れる。実際マユという登場人物の中に、何らかのアイデンティティを見いだすことはできない。しかしながらそれにもかかわらず、カツヤにとってマユの暴力は、何か神秘的なもの、比嘉の絶対性に対抗し得る別の絶対性を持ったものとして映っていたことは否定できない。

そのことは、カツヤが病的なまでに、マユの背中に彫られた「虹の鳥」の刺青が覚醒する夢想に取り憑かれていたことから理解できる。現実レベルで彼が信頼できるものは比嘉の暴力だけであったが、唯一それに対抗し得る希望は、不可能であるが幻想的レベルとして存在する、虹の鳥へのアクセスであった。象徴的救済をもたらすはずの虹の鳥は、カツヤにとってある種の宗教的意味合いを持ち得る存在である。そして物語の最後で、虹の鳥の覚醒はマユの対抗暴力の発動によって実現する以上、その暴力を「絶対的なもの」として発現する宗教的次元（同書：

「30」を備えた超政治的暴力として理解することは可能であろう。そして、虹の鳥の暴力は「自分だけが生き延びることができ〔略〕他の仲間はずべて死んでしまう（目取真2006：164-165）」結果をもたらす終末論的な性質を持ったものであったが、このことはヴィヴィオルカの「もはや宗教的ユートピアへの期待」ではなく「破壊的な意味の喪失」に結びつく（Wieworka：211）という定義にも対応する。

このように考えたとき、カツヤという登場人物を、（米兵の少女レイプ事件への抗議集会に象徴される）政治的非暴力の無力さの傍らで、政治下位的暴力と超政治的暴力というふたつの非政治的暴力の狭間にゆらぐ主体と捉えることができる。『虹の鳥』の中で、米兵のレイプ事件に対する抗議集会とデモは、物語に重要な意味を与える背景として、反復して描かれている。しかしながら現実の沖縄で展開された政治的非暴力のこの運動は、物語内ではあくまで背景に留まっている。それは物語の前景に位置するカツヤに響き、肯定的な意味を与えるものではない。この一九九五五年のデモについてカツヤは「これまでに何度もデモを見てきたが〔略〕いつもとは違う迫力があるように感じた（目取真2006：101）」という印象は持つが、しかしながらそれでも彼を捕らえるのは「怒りは表しても、決して越えようとしなない一線が、基地の金網のように人々の心に張りめぐら

されている」という諦観からくる「白々しさとやりきれなさ（同書：104）」だけであった。「本当にどうして燃やさないのだ」とカツヤは「胸の中でつぶや」くが、「考えて何になる。これ以上自分を追いつめるな（同書：107）」と、自らの怒りから目をそらすことで自己解決を図る。彼にとって沖縄は「襲う奴と襲われる奴が」ア・プリオリに決定されている空間ではない（同書：106）。

そのようなカツヤと比較して、『希望』の主人公は、この同じ抗議集会について「三名の米兵が少女を強姦した事件に、八万余の人が集まりながら何一つできなかった茶番」として軽蔑している点でカツヤと認識を共有しているが、「あの日会場の隅で思ったことを実行できた（目取真2002：290）」という点でカツヤと決定的に異なる。『希望』の主人公は、自らの主体的決定として米兵の子供殺しを実行する。そしてそれは、先に確認したように、政治的暴力として機能し得た。彼の暴力は、主体的決定によってなされた政治的暴力であったからこそ、ひとつの「希望」となり得た。しかしながらカツヤはそのような契機を決定的に欠いている。そして彼のこの欠落を補充し、償ってくれるものこそ、比嘉とマユによってもたらされる二つの非政治的暴力であった。

ところでヴィヴィオルカの定義によれば、政治下位的暴力は

基本的には非政治的暴力であるが、ある状況下においては「暴力の政治下位の性質が〔略〕政治的レベルの上昇を可能にする前政治的形態 prepolitical form を取る (Wiewiorka: 126-129)」ことはあり得る。マユへのリンチの場面で、抗議集会のテレビを見ながら比嘉は「吊るしてやればいいんだよ。米兵の子供をさらって、裸にして、五八号線のヤシの木に針金で吊るしてやればいい (目取真: 190-191)」とつぶやくが、比嘉の発したこの言葉は、『希望』の主人公の主張に直接的に響鳴する。そして同時にそれは、カツヤの内面で決して言語化することがかなわなかった政治的暴力の意思の代弁として機能していた。それならば、比嘉の政治下位の暴力は「政治的レベルの上昇を可能にする前政治的形態」をその潜在的可能性として持っていたことになるのではないか。『希望』では主人公の主体的決定によって実現した政治的暴力は、『虹の鳥』では、黙し躊躇するカツヤの代弁として、まず比嘉の言語を通じてその可能性が見いだされることになる。

しかしながら『虹の鳥』において、『希望』での殺人が実際に引き継がれるのはマユの身体を通じてである。マユの身体を介して発動された対抗暴力によって、「その憎しみと暴力はいつか奴らに向かうだろう」という予言は成就する。しかしながら既に確認したように、彼女の超政治的暴力には現実政治に結

びつく経路が遮断されていた。マユの米兵の子供殺しは、「襲う奴と襲われる奴が決まっている島」という決定論的諦観に侵されるカツヤの失意と欠落を、専ら象徴的、あるいは幻想的レベルで補償、補完するものとして機能していた。

四 政治的空間から幻のヤンバルへ

しかしながら同時に、このマユによる米兵の子供の殺害は、本作品において最も奇異で矛盾した印象を与える場面でもある。冒頭に紹介した「それはいつか奴らに向かうだろう」という予言に則って目的論的に読めばマユの行動を理解することはできるが、作品内にマユが米兵の娘を殺す論理的動機は一切描かれていない。むしろ作品内で、沖繩の「あめりか」の問題が歴史的社会的な具体性をもって最も深く結び付けられているのは、カツヤである。

このことは、作品内である種の役割分担が行われていることを示唆する。マユという登場人物は、例えば新城郁夫の表現を借りれば「性の収奪と支配というレイプの暴力が、基地問題をはじめとする社会政治的問題の基盤において作動している (新城 2008: 18)」空間としての沖繩を表象するジェンダー化された身体として象徴的役割を担っている。言い直せば、マユはそ

の身体を通じて、暴力の下に晒された沖繩の歴史的社会的現実を象徴する、キャラクターである。しかしながらその際、彼女の存在が沖繩の具体的な現実問題に結びつくような設定はほとんど認められない。作品内でマユの家庭は「地縁血縁関係が薄く、孤立した家庭（目取真 2006：78）」であったと説明されているが、このことはすなわち、象徴的レベルでマユは、沖繩の悲劇性を体現する身体を提供しながら、現実レベルで彼女は、沖繩の日常、社会、歴史に接続する具体的鞭帯を欠いた存在として設定されていることを意味する。

それとは対照的にカツヤは、沖繩の具体的な歴史的社会的現実の土壌に深く根ざした登場人物として設定されている。カツヤは、軍用地料によって収入を得ている父の息子であり、基地の存在と引き換えに得た金で暮らすことに根本的な嫌悪感を覚えている。また姉をアメリカ兵にレイプされた経験を持ち、そのような諸々の沖繩の具体的な現実問題に絡み取られながら逡巡し、苦悩する。換言すれば、カツヤは、自らに設定された状況の具体性によって、沖繩の歴史的社会的現実を代表する、キャラクターである。

マユは沖繩の悲劇性を象徴する身体であり、カツヤは沖繩の具体的な現実問題を代表する意識である。この二つの役割を相互に置き換えることはできない。このことは、言い換えれば、状

況に苦悩する意識が、振るわれた暴力の大きさ故に対抗暴力を発動させるに至った身体と、完全に分離している状況を表している。『希望』においては、「軍用地料だの補助金だの基地がひり落とす糞のような金に群がる蛆虫のような沖繩人（目取真 2002：289）」として苦悩する主人公の意識が、自らの手で米兵の子供殺しを実行し、自らの身体に火を放つという主体的行為によって、その身体を犠牲化させながらそれを政治的主張に結び付けることを可能にした。しかしながら、『虹の鳥』においては、意識と身体が悲劇的に分離している。この「暴力」という同一の問題系を扱うかに見える二つの作品の相違は、どこから来るのだろうか。

『希望』が発表されたのは一九九九年のことである。すなわち『虹の鳥』が二〇〇四年から一九九五年を見るという遠近法によって書かれたのに対して、『希望』は一九九九年から一九九五年を見るという遠近法によって書かれている。先に紹介した佐藤泉の分析によれば、一九九五年（米兵レイプ事件への抗議集会——『虹の鳥』と『希望』の舞台となる）と二〇〇四年（『虹の鳥』の発表）という時差が重要な意味を持っていたとされたが、そこに一九九九年（『希望』の発表）という軸を加えることによって、この問題をより立体的に理解することが可能になるように思われる。再度確認するが、佐藤の分析によれば、

一九九五年の時点では、米軍の暴力の犠牲となった少女の身体が、その悲劇性を乗り越えて社会変革のための政治的意味を持ち得たが、二〇〇四年には、沖繩の犠牲がいかなる政治的意味をも持ち得ない状況が起きていたという。目取真自身の言葉で借りれば、この十年弱の間に起きた事態は、以下のように要約できる。

三名の米兵によって少女に加えられた暴力への怒りと抗議は、基地反対の大きなうねりを作り出しました。大田知事(当時)の代理署名拒否や八万五〇〇〇人が集まった県民大会などを前にして、日米安保体制の危機を感じた日本政府は、沖繩のおかれた状況を変えるのではなく、反基地のうねりをつぶすために力を注ぎました。

その主な手段は、基地関連の補助金と振興策でした。島田懇談会事業や九州・沖繩サミットの決定、二〇〇〇円札の発行、十年間で一〇〇〇億円という北部振興策など、矢継ぎ早に「毒入りのアメ」をばらまき、「基地問題」を「経済問題」にすり替えていきました。その一方で、普天間基地の「返還」を目玉としたSACO(日米特別行動委員会)の合意を打ち出します。だが、そこで示された基地の「整理縮小」案は、沖繩県内に「代替施設」を造るというものであり、基地

の「県内たらい回し」でしかありませんでした(目取真 2005: 110-111)。

すなわち、政治的意味を持ち得た一九九五年の抵抗が骨抜きにされ、沖繩の「犠牲」から政治的意味が剝奪された過程には、補助金と振興策という「毒入りのアメ」が大きな役割を果たしている。それならば、その具体的な転換の契機となったのは、「毒入りのアメ」のばらまきにおいて中心的な役割を果たした稲嶺県政への一九九八年の政権交替であると理解するのは自然であろう。そのように考えた時、一九九九年という年は、一九九五年の「犠牲」の政治的意味が失われ始めた時期であり、それゆえ『希望』においては、一九九五年の政治的非暴力に対する必然的なもう一つの選択肢としての政治的暴力が動員されたが、一方、沖繩国際大学のヘリ墜落事件に対する「国民的」無関心に象徴される二〇〇四年の局面では、沖繩の「犠牲」における政治的意味が失われ、尽くされた時期であり、それゆえ『虹の鳥』において象徴的であったのは、むしろ暴力の非政治性、あるいは暴力における政治の不可能性であったと考えられないだろうか。そしてこの非政治性は、カツヤという苦悩する主体の意識から、マユという身体を分離させた。なぜなら、犠牲と対抗暴力を同時に象徴するマユという身体に付与された本質的

属性は「不可能性」であったからである。

そしてカツヤにとって、この「不可能性」を超越する契機は、もはや現実的次元には存在し得ず、それゆえ彼は幻想的次元を求めた。マユの対抗暴力が実現した後、彼は「虹の鳥」へのアクセスを実現するために、「ヤンバル」という幻想的空間を志向し、そこで身体としてのマユとの結合を図る。分裂してたカツヤの意識の再統合と再生は、公共空間の域外に位置する超越的な自然としての沖繩において、マユの身体を媒介として果たされる。

夜の森の奥に裸のマユが立っている。露に濡れた木々や草の葉、森に住む生き物たち、それら全ての発する匂いが森の冷気に浄められ、マユを包む。白いからだがしっとり濡れている。固い種子が割れ、新芽が芽吹くように火傷の跡が消えて、新しい肌が現れる。(目取真2006:219)。

私は、この幻想的なラストを、決してある種の現実問題からの「逃避」であると捉えてはならないと考える。むしろ、二〇〇四年の沖繩の現実における疎外状況が、カツヤに象徴される沖繩の苦悩の意識を、幻想空間という公共圏の枠外に放逐するまでに至ったのだと理解するべきではないだろうか。二〇〇四

年の沖繩の公共空間において、「犠牲」は不可視化され、対抗暴力の可能性は政治的不可可能性をその内に刻印された。そのような状況下で一九九五年の公共空間における非暴力的政治運動を眼差す時、眼差した主体は、すでに自らの政治的可能性を奪われて、その抵抗が公共空間の域外に追放されている疎外状況を認識する。「ヤンバル」という幻想空間におけるカツヤの象徴的再生は、裏を返せば、公共空間での彼の政治性と政治的暴力の可能性の喪失を意味する。そしてそのような状況の背後で、植民地的暴力は、巧妙にカムフラージュされながらも、なおその力を弱めることなく脈々と発動され続けている。

そして最後に、我々は本作品の意義を、このような沖繩の現状に対して我々が取り得る立場表明を求めるものとして理解する必要があるだろう。かつて富山一郎が、『希望』が提示した沖繩の現状に関して、「この状況の中で、おまえは一体どこにいるのか(富山:85)」という問いを発したのと同様に、『虹の鳥』もまた、その重層的で多様な読者に対して、「お前」は、「お前たち」は一体どこにいるのかと、辛辣に問いかける。暴力／非暴力と、非政治性／政治性を巡るカツヤとマユの壮絶な物語を目の当たりにして、「お前」は、「お前たち」はいったいどのような立場をとるのか、そのような問いが、一切の妥協を許さない峻厳な筆致で投げかけられている。そしてそれは同時

に、本論文を書いている二〇一〇年八月現在、在沖縄米軍基地問題に関して、鳩山総理の「最低でも県外」発言の後およそ一年の迷走を経て、V字滑走路建設を含む普天間基地の辺野古移

設という従来案に逆行するという憂慮すべき事態を目の当たりにして、「私」は今一体どこにいるのかという、自己詰問に結びつくものでもなければならぬ。

参考文献（外国語の文献の翻訳は本論文著者による）

Judith Butler, "Violence, Nonviolence, Sartre on Fanon" in Jonathan

Judaken (ed.), *Race after Sartre*, SUNY Press, 2008

Franz Fanon, *Les Damnés de la terre*, La Découverte, 2002

目取真俊、「希望」『沖繩／草の声・根の意思』世織書房、二〇〇二

目取真俊、『沖繩「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会、二〇〇五

目取真俊、『虹の鳥』影書房、二〇〇六

Jean-Paul Sartre, "Preface" in Franz Fanon, 前掲書

佐藤泉、「一九九五—二〇〇四の地層 目取真俊『虹の鳥』論」新

城郁夫編、『攪乱する島——ジェンダー的視点』社会評論社、二

〇〇八

新城郁夫、「資源化される沖縄の命」黒澤亜里子編、『沖国大がアメ

リカに占領された日』青土社、二〇〇五

新城郁夫、「はじめに」『攪乱する島——ジェンダー的視点』前掲書

富山一郎、「テロルを思考すること／目取真俊『希望』」『インパク

ション』一九九号、二〇〇〇年五月

Michel Wieworka, "The New Paradigm of Violence" in Jonathan

Friedman (ed.), *Globalization the State, and Violence*, Alhambra

Press, 2003

(おぢあ ぞんた／非常勤講師)